

拜啓 秋冷の候、貴社にはますます御監査の殷大賀至極と存じ上げます。

突然且つぶしつけなお願いで恐縮に存じますが、以下の点につきまして御高配いただきますれば、私達にとりまして無上の喜びとするところであります。

私達は、登山する者の夢である世界の屋根ヒマラヤに、いつか挑む日のあることを念じつつ、二十年来、ヒマラヤの研鑽と登攀能力の養成並びにこれが実現に努力してまいりました。その事情は、別冊計回国書に記しましたが、特に、実現への顕著な努力としては下記のものがあります。即ち、貴社既に御承知のごとく、私達は昭和二十九年、名古屋大学山岳会の計国として、エベレスト登頂後におけるヒマラヤ登山の新しい目標、ともいふべき恐怖の峯として知られたジヤムニー峯（七、七一〇米）への登頂を計画しました。

これがため、一方においては、委員長藤田精蔵氏（名大総長）、顧問加藤練五郎氏（当時陸務大臣）を初めとして強力な組織を結成し、他方においては、貴社に全服御後援のほどお願い申上げたのであります。

しかし、そのときの計画は、当時進行中であつたマナスル登山並に極度に逼迫していた外貨事情等のため、貴社からも実現困難の御指示をいただき、残念ながら中止のやむなきにいたりました。

しかし、今やマナスル登山は終結しましたので、私達は前回の努力に引きつづき今回再びヒマラヤ登山を実現すべく御意準備にとりかかつた次第であります。

計画実現のための最大の隘路は、申上げるまでもなく資金の調達であります。これはもとより私達のみで工面するのが本筋であります。如何せん微力を以てしては困難であります。貴社には甚だ御迷惑と存じますが、上述の事情おくみとり下さつて、私達の計画実現のため御後援いただきますことを衷心からお願ひ申上げる次第であります。

なお、私達のヒマラヤ計画の実現は「露東、露西ばかりでなく中京からもヒマラヤへ」という名古屋市民はもとより、東海三県民の夢の実現でもあると確信するところであります。私達は、貴社の御後援によりましてヒマラヤが実現をみた時には、専ら賀意を旨とし、あらゆる困苦に堪え、日本の登山隊として恥かしからぬ行露をしてまいる覚悟であります。

私達は、計国の実現にあたり、スポーツ、文化に深い御理解をもたれる貴社に全服御借願申上げ、計国の変更、修正等につきましても貴社の御意向に願ひたき考えしております。何とぞ御支援、御指導のほどをお願い申上げる次第であります。

敬 具

昭和三十三年十月三日

| | |
|---------------------|---------|
| 名古屋大学山岳会会長 | 須賀太郎 |
| 岩 校 会 副 会 長 | |
| 岩 校 会 会 長 | |
| 名 大 山 岳 会 実 行 委 員 長 | 石 岡 繁 雄 |